九州地方域方言におけるキリシタン語彙
Santa Mariaの受容史についての地理言語学的研究

小川俊輔

【一　はじめに】

一．本稿の目的と方法

本稿は、九州地方域方言におけるキリシタン語彙[注一] Santa Maria（聖母マリア）の受容史の考察を目的とする。九州地方全域三〇〇地点において方言実地調査を行い[注二]、得られた資料から方言事象分布地図を描き、方言事象の分布を解釈することによって当該事象の受容史を考察する。

二．先行研究と本稿との関係

日本における言語地図の解釈研究では、主に基礎語や日常生活語が考察の対象にされてきており（国立国語研究所（一九六六―一九七四、一九八九―二〇〇六）、柴田（一九六九、一九八八―一九九五）、藤原（一九七六）など）、本稿が取り扱うような項目は対象にされてこなかった。また、本稿で考察を行う宗教と方言事象分布との関係についても、これまでに十分な研究がなされたとは言えない状況にある。特に、キリスト教と方言事象分布との関係を考察した先行研究は皆無であった[注三]。

他方、文献国語史の分野ではキリシタン語彙を扱った多くの先行研究があるけれども（土井（一九三三）、橋本（一九六一）、福島（一九七三）亀井他（一九八三）、小島（一九九四）など）、方言実地調査に基づいて諸地域におけるキリシタン語彙の受容史を考察した研究は見られなかった。

以上のような研究状況下にあって、筆者は九州地方全域における方言実地調査に基づいてキリシタン語彙の受容史に関する実証的研究を行ってきた（Ogawa（二〇〇六）、小川（二〇〇六、二〇〇七刊行予定a、b）など）。本稿は、筆者によるキリシタン語彙の受容史に関する地理言語学的研究の一部をなすものである。

三．質問文

（聖母マリアの絵（絵1・2）を見せて）この絵に描かれている

聖母マリア2

聖母マリア1

方はなんという名前ですか？

【二　方言事象分布の概観】

一．[santamaria] 類の分布域

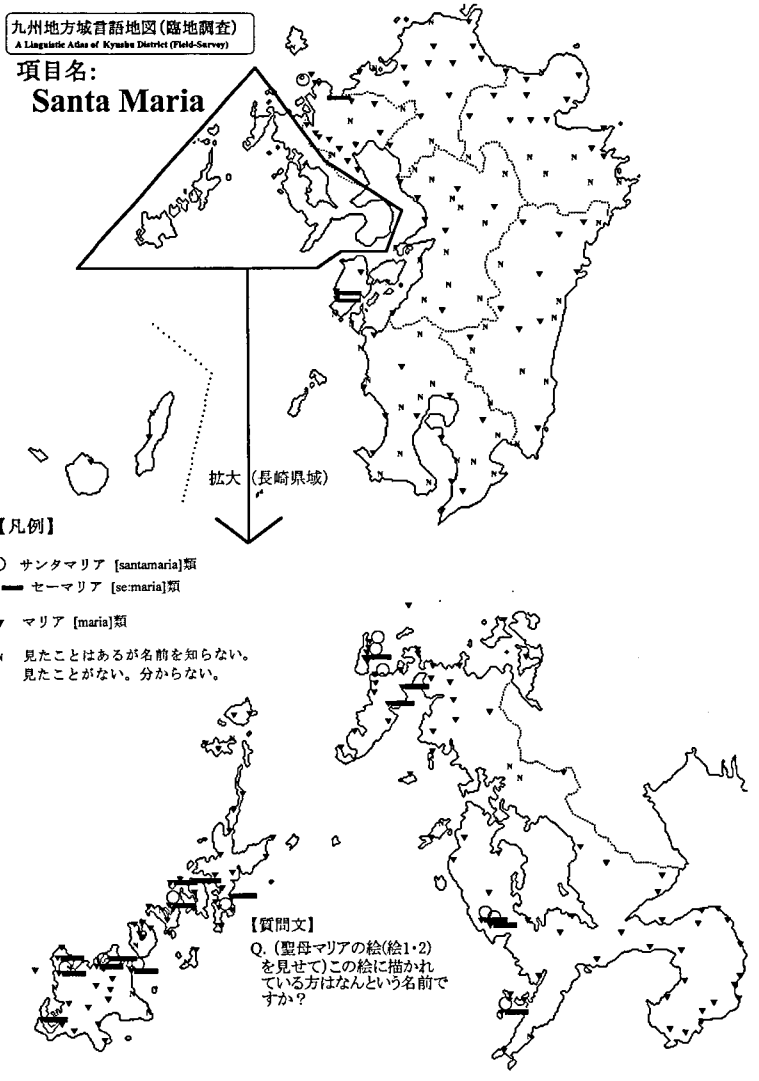
[santamaria] 類は、当該地域において一二地点に分布している。長崎県の離島地域に九地点（生月島に二地点、平戸島に一地点、五島列島に五地点、高島に一地点）、長崎県西彼杵半島に二地点、佐賀県の馬渡島に一地点分布している。すなわち [santamaria] 類は九州地方の辺境地域に分布していることになる。

二．[se:maria] 類の分布域

[se:maria] 類は、当該地域において一九地点に分布している。[se:maria] 類の分布域は [santamaria] 類の分布域と似ている。すなわち [se:maria] 類も [santamaria] 類と同様に辺境地域に分布していることになる。ただし、[santamaria] 類に比べると [se:maria] 類の分布域の方がやや広く、分布地点数もやや多い。

三．[maria] 類の分布域

[maria] 類は、当該地域において最も広くまた多く分布している。具体的には、[maria] [mariasama] [mariasan] などの事象が使用されている。九州全域に分布していることから、当該地域おける共通語的事象として使用されているものと解釈される。


九州地方域言語地図(臨地調査)
A Linguistic Atlas of Kyushu District (Field-Survey)
項目名:
Santa Maria
拡大 (長崎県域)
【凡例】
○ サンタマリア [santamaria]類
▬ セーマリア [se:maria]類
▼ マリア [maria]類
N 見たことはあるが名前を知らない。
見たことがない。分からない。
【質問文】
Q. (聖母マリアの絵(絵1・2)
を見せて)この絵に描かれ
ている方はなんという名前で
すか?

地図 1

【三　方言事象分布の歴史的解釈】

一．信仰対象である「聖母マリア」に対する尊称として用いられている［santamaria］類と［se:maria］類

（一）［santamaria］の語源と文献上の用例

一五九三年・天草刊『ばうちずもの授けやう』には、次のとおり「さんたまりや」の用例がある（林（一九八一）の翻刻による。傍線は筆者）。

其ことく我等か科も御まへにかくれなければ御ゆるしをかうぶらん為には誰人の御とりなしを頼み申べきぞと云にひたすら御母さんたまりやにすがり付奉りいかに御母びるぜんまりや我を御せいばいなされざる様に御子ぜずきりしとへ御とり合をなし給へ

同書の他に一六〇四―一六〇八年・長崎刊『日本大文典』にも「Sancta Maria」の用例が見られる。

諸辞書によれば（参考文献参照）ポルトガル語・スペイン語では、現在でも「聖母マリア」を Santa Maria と呼称している。他方、ラテン語では Sancta Maria、現代英語では Saint Mary と呼称する。

また、中世末期に貿易と布教とを目的に来日したのは、ポルトガル（一五四二―一六三九）とスペイン（一五九二―一六二四）の商人・宣教師であり、この期間に、両国語（特にポルトガル語）から多くの外来語が受容されている（桜垣（一九六三）による）。

以上のことから、地図上に表れている［santamaria］類の語源はポルトガル語・スペイン語の Santa Maria であると解釈される。

（二）［se:maria］の語源と文献上の用例

［se:maria］の［se:］の語源については、二通り考えられる。一般的には、ラテン語 sancta・ポルトガル語 santa・英語 Saint などの訳語「聖」だと考えられている（『日本国語大辞典　第二版』ほか。同書は「聖～」の初出として、前田久八（一九一〇）『洋楽手引』を挙げる。但し用例は「聖ペテロ」「聖パウロ」であり、「聖マリア」の初出については記載がない）。

なお、一八七四年・長崎刊『聖教日課』（カトリック信者が日々の信仰生活の中で祈るべき祈祷文を集積した書）に次のとおり記載がある（上田敏全集刊行会（一九八五）の翻刻による。ルビもそのまま引用）。

童身聖瑪利亜は聖額伯理尼爾大天神を以て御告ありければ其御胎内に於て天主の御子費畧は人となり給ふと云事

一八七四年に長崎で刊行されたカトリック教理書において「santa」に「聖」の字があてられ、「さんた」とルビの振られていることには大いに注目すべきであろう。すなわちこれは、「［se:］の語源は「聖」字である」とする説の有力な根拠になると考えられる。

別の語源として、英語 Saint［seint］の音訳語も考えられる。ただし、これを積極的に根拠づける資料を探せていない。

(三) 回答された事象と被調査者の帰依する宗教との関係

ここでは「自分が［santamaria］類・［se:maria］類を使う」と回答した被調査者のみを取り上げる。

まず、［santamaria］類を回答した被調査者が帰依する宗教とその人数は次のとおりである（［santamaria］類の分布地点数＝一二）。

○カクレキリシタンである被調査者＝二名
○元はカクレキリシタンで現在は仏教徒である被調査者＝二名
○元はカクレキリシタンで現在はカトリック信者である被調査者＝二名
○カトリック信者である被調査者＝六名。

右のとおり、［santamaria］類を使用しているのはカクレキリシタン（元カクレキリシタンも含む）かカトリック信者かのどちらかである。すなわち、［santamaria］類を使用している仏教徒はまったく存在していないのである。このことは、以下に記す［santamaria］類の事象に対する被調査者の説明からも確認できる。（（　）内には調査地点、被調査者の帰依する宗教、調査年月日を記している。）

○「我々（＝カクレキリシタンのこと。筆者注）はサンタマリア様に祈っている」（長崎県平戸市生月町山田、カクレキリシタン、二〇〇三・八・二七）
○昔、カクレシュー（＝カクレキリシタンのこと。筆者注）が言っていた。（長崎県南松浦郡新上五島町立串郷大瀬良、神道、二〇〇四・三・一）
○カクレシューの本に名前がある。（長崎県南松浦郡新上五島町桐古里郷深浦、カクレキリシタン、二〇〇四・三・八）
○カクレキリシタンがオラッショ（カクレキリシタンの祈祷文のこと。また祈祷行為そのものもさす。筆者注）の中でサンタマリアというらしい。（長崎県五島市奈留町南越、カトリック、二〇〇四・三・一一）
○この集落はカクレだが、サンタマリアを使っていたと思う。（長崎県五島市奈留町永這、元はカクレキリシタンで現在は神道、二〇〇四・三・一〇）
○カクレキリシタンが言う。（長崎県福江市戸岐町宮原、カトリック、二〇〇四・三・一二）
○お経の中に出てきた。（長崎県五島市富江町富江郷、仏教（但し高校はカトリック系の学校に通った）、二〇〇四・三・一二）
○この土地で言っている人がいた（この集落にはかつてカクレキリシタン組織が存在していた。またカトリック教会も建っていた。筆者注）。マリアとサンタマリアとセイマリアは全て一緒。（長崎県五島市猪之木町細石流、仏教、二〇〇四・三・二四）
○数十年前、この家にカトリックの神父さんが来るようになって耳にした。（長崎県北松浦郡小値賀町笛吹郷新町、仏教、二〇〇四・三・二六）
○キリシタン（カトリック教徒。筆者注）が言う。（長崎県北松浦郡小値賀町斑郷、仏教、二〇〇四・三・二七）
○お祈りの言葉にサンタマリアが入っている。（長崎県平戸市生

月町御崎、元はカクレキリシタンで現在は仏教、二〇〇四・五・六）

○カトリック信者が言う。（長崎県平戸市生月町館浦南免、仏教、二〇〇四・五・七）

○カクレギリシタンで言う。（長崎県平戸市生月町里免、カクレキリシタン、二〇〇四・五・七）

○カクレキリシタンの人が言う。カトリックの人は言わない。（長崎県平戸市生月町山田免、カトリック、二〇〇四・五・八）

○よその宗教の人が言っている。（長崎県平戸市獅子町、仏教、二〇〇四・五・八）

○今は使わないが、前は言っていた。（長崎県平戸市春日町、元はカクレキリシタンで現在は仏教、二〇〇四・五・九）

○昔の人の言い方。（長崎県平戸市紐差町、カトリック、二〇〇四・五・一一）

次に［se:maria］類を取り上げる。［se:maria］類を回答した被調査者が帰依する宗教とその人数は次のとおりである（［se:maria］類の分布地点数＝一九）。

○カトリック信者である被調査者…一七名

○仏教徒である被調査者…二名

右のとおり、［se:maria］類を主に使用しているのはカトリック信者である。

（四）考　察

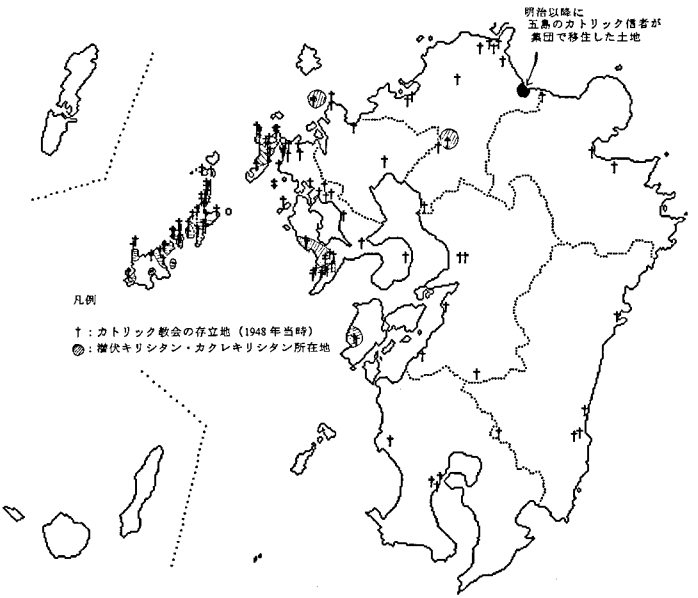
（一）（二）（三）にあげた文献資料および回答事象と被調査者の帰依する宗教との関係から、［santamaria］類と［se:maria］類は信仰対象である「聖母マリア」に対する尊称として用いられている事象であると解釈される。（仏教徒二名が［se:maria］類を回答しているけれども、両地点（長崎県五島市玉之浦町玉之浦郷、佐賀県唐津市中町）ともカトリック教会が建っている土地であるので、土地のカトリック信者から伝え聞いた事象をそのまま使用し、回答しているものと解釈できる。）

地図2はカクレキリシタンの信仰組織所在地域及び一九四八年当時のカトリック教会存立地域とを示している。両地域は重なっている（長崎県五島列島、西彼杵半島、野母半島、平戸島、生月島など）。［santamaria］類及び［se:maria］類が回答されているのはまさしくこの地域であり（地図1参照）、この一致は、［santamaria］類と［se:maria］類に関する右の解釈を傍証する事実であると考えられる。

二、潜伏キリシタン・カクレキリシタン[注四]の人々の間で代々伝承されてきた［santamaria］類

三、一、（一）において、中世末期から近世初期にかけて出版されたキリシタン文献に［santamaria］類の用例があることを示した。次に、近世後期の文献上における［santamaria］類の用例をあげる。

斯てさんた丸やは、すぐに我家にかへりければ、親は丸やの懐胎を見出、大きに怒つていふようは



地図2

右は、長崎地方の潜伏キリシタンに伝えられた『天地始之事』における用例である（田北耕也により、文政年間（一八一八―一八二九）の書写本と推定されている。土井他（一九七〇）の翻刻による）。

続いて、近世末期（一八六五・三・十八）の文献上における Santa Maria の用例をあげる。

Santa Maria gozo wa doko?

右は、長崎・大浦天主堂のプチジャン司教に対する、浦上地区に住む潜伏キリシタンの老女の発言である（純心女子短期大学長崎地方文化史研究所（一九八六）『プチジャン司教書簡集』による）。

現在でもカクレキリシタンが［santamaria］類を使用していること、［santamaria］類の分布域とカクレキリシタン組織の所在地域とが一致していることは三・一・（三）及び（四）に記したとおりである。

これらの事実から、［santamaria］類は中世末期以来、代々潜伏キリシタン・カクレキリシタンの人々に受け継がれてきた事象であると解釈される。

三・明治期以降カトリック教会でも使用された［santamaria］

三・一・（三）に記したとおり、［santamaria］類はカトリック信者である被調査者八名（元カクレキリシタンを含む）からも回答されている。すなわち、カトリック教会でも用いられているのである。

三・一・（二）の中で明治初期に長崎で出版されたカトリック信者のための祈祷文集『聖教日課』における［santamaria］類の用例をあげ

ているけれども、この時期には同書の他にも同種の諸文献上（一八六九年『胡無知理佐无之略』、一八六九年『とが除き規則』、一八六九年『彌撒拝禮式』、一八六九年『玫瑰花冠記録』、一八七二年『聖教初学要理』）など）に［santamaria］類の用例が見られ、「さんたまりや」「聖まりや」などと表記されている。

長崎県域のカトリック信者から［santamaria］類が回答されたのは、右のようなカトリック教理書による布教活動が基盤にあるものと考えられ、明治期以降カトリック教会でも［santamaria］類が使用されたものと解釈できる。

四、［santamaria］類及び［se:maria］類の受容史

両事象の受容史について被調査者の帰依する宗教毎に考察する。

（一）カクレキリシタンの人々

［santamaria］類が潜伏キリシタン・カクレキリシタンの人々の間で代々伝承されてきた事象であるとみられることは三、二、に記したとおりである。現カクレキリシタンの被調査者からは［se:maria］類が全く回答されていない（三、一、（三）参照）ことから、カクレキリシタンの人々は一貫して中世末期以来の伝統を持つ事象［santamaria］類を使用し、明治期以降の事象と見られる［se:maria］類を受容していないものと解釈される。

（二）カトリック信者の人々

カトリック信者である被調査者からは、［santamaria］類及び［se:maria］類双方が回答された。他方、カクレキリシタンである被調査者から［se:maria］類は回答されていない。カトリック信者である被調査者のうち、

① ［santamaria］類のみを回答したのは一名
② ［santamaria］類と［se:maria］類の双方を回答したのは七名
③ ［se:maria］類のみを回答したのは一〇名

であった。

このことに加え、三、一、（三）に記した被調査者の［santamaria］類に対する説明において、「［santamaria］類はカクレキリシタンの言い方」との説明が多数ある一方で、「［santamaria］類はカトリックの言い方」との説明はほとんど見られないことから、当該地域のカトリック教会では［santamaria］類よりも［se:maria］類の方が勢いを得て使用されているものと解釈される。

（三）カクレキリシタン・カトリック信者ではない人々

「カクレキリシタン・カトリック信者ではない人々」とは仏教徒、神道氏子などの人々である。これらの人々は［santamaria］類・［se:maria］類を受容していない。このことは「［santamaria］類・［se:maria］類は、ともに信仰対象である「聖母マリア」への尊称として用いられている」との解釈（三、一、（四）参照）を傍証する事実であると考えられる。

（四）「聖母マリア」の受容が進んでいない九州中南部地域

地図1上には「（マリアの絵1・2を）見たことはあるが名前を

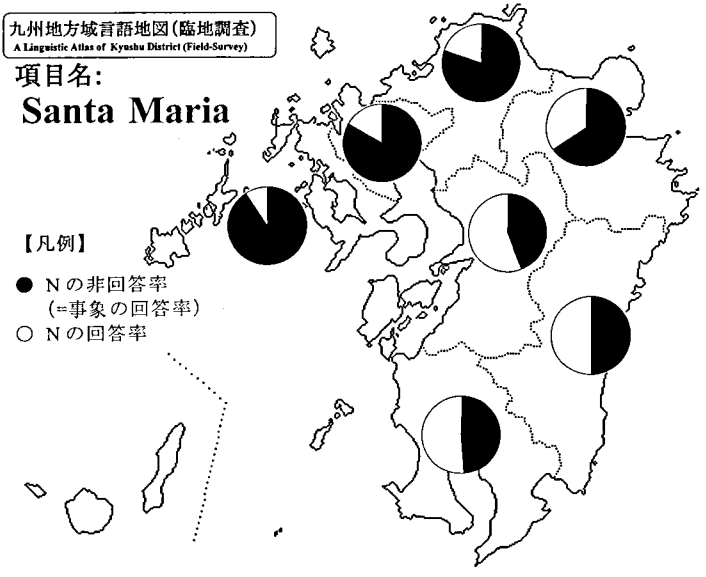
知らない」「見たことがない。分からない」と回答された地点に「N」の字を押印している。九州中南部地域において広範囲に多数の「N」の分布がみとめられる。表1は各県毎の全地点数、Nの回答地点数、Nの回答率（%。小数点第二位を四捨五入）を一覧したものである。

表から長崎＞佐賀＞福岡＞大分＞宮崎＞鹿児島＞熊本の順に「聖母マリア」の受容度が高いことを読みとることができる。これを地図上に表したものが地図3である。地図3は各県毎にNの回答率を円グラフで表している。（●がNの非回答率（＝事象の回答率）、○がNの回答率を表している）

表1から長崎県におけるNの回答率が他県のそれと比べて著しく低いことが分かる。すなわち、長崎県域では「聖母マリア」の受容が他県に比べて進んでいるのである。地図2に示したとおり、長崎

表1

	全地点数	Nの地点数	Nの回答率（%）
福岡	15	3	20・0%
佐賀	18	3	16・7%
長崎	137	13	0・9%
大分	20	7	35・0%
熊本	25	14	56・0%
宮崎	20	10	50・0%
鹿児島	29	15	51・7%



地図3

県域には他地域に比べて著しく高い密度でカトリック教会が建立されている。多くの教会があるということは、多くの信者がいるということであり、それだけ「聖母マリア」を信仰しない人々にも「聖母マリア」を目にしたり耳にしたりする機会が多くなるはずである。その結果が受容差に反映されているものと解釈される。

長崎に次いでNの回答率が低いのは佐賀県である。地図1を見れば明らかなように、長崎県と佐賀県とが接する地域では、Nがほとんど分布していない。このことが、佐賀県におけるNの低回答率の要因となっている。ここには「隣接伝播」の摂理が働いているものと考えられる。

佐賀県に次いでNの回答率が低いのは福岡県である。その理由として、

①近世期に潜伏キリシタン組織が存在し、明治以降にカトリックへの教化が行われた三井郡大刀洗町今村や、明治期以降に長崎・佐賀のカトリック信者が集団で移住してカトリック教会を建立した能古島（福岡市）、行橋市徳永、築上郡築城町船迫・弓の師などの存在

②九州地方の中心地として発展し、人口流入により都市部に多くのカトリック教会が建てられたこと

③「隣接伝播」の摂理にしたがって、長崎から佐賀、佐賀から福岡へ「聖母マリア」が受容されたこと

などが考えられる（二〇〇四年七月現在における福岡県のカトリック教会数は三八であり、長崎県の一二九に次いで多い。以降、鹿児島県二七（奄美地方を除く）、熊本県一七、大分県一六、宮崎県・佐賀県一一となっている。なお、この教会数には巡回教会、集会所が含まれる。カトリック中央協議会出版部（二〇〇四）による）。

福岡県に次いでNの回答率が低いのは大分県である。県北部ではNの回答率が低く、県南部ではNの回答率が高い（地図1参照）。大分県北部におけるNの非分布地域は、長崎県・佐賀県・福岡県におけるNの非分布地域と繋がっており、大分県南部におけるNの分布地域は、宮崎県・熊本県・鹿児島県におけるNの分布地域と繋がっている。すなわち、九州北部地域（長崎県・佐賀県・福岡県・大分県北部）では「聖母マリア」の受容が進み、九州中南部地域（大分県南部・宮崎県・熊本県・鹿児島県）では受容が進んでいないのである。

ともに福岡県に隣接する大分県と熊本県との間で「聖母マリア」の受容に差がみられるけれども、筆者はその理由を次のように考えている。日本キリスト教歴史大事典編集委員会（一九八八）によれば、大分県域では中世末期にキリシタン大名・大友宗麟によってキリシタンが保護され、多くの宣教師・信者が存在していた。この事実は明治期のカトリック宣教者にも認識されており、同地域において明治初期から積極的な宣教活動が行われ、カトリック教会・伝道所が建立された（大分市、竹田市、豊後高田市には一八八七年に、中津市には一八八九年に、臼杵市には一八九一年にそれぞれ教会・伝道所が建立されている）。実際に、大分県では熊本県（潜伏キリシタンの存在した天草地方を除く）よりも早くカトリックの布教活動が始められていた。以上の歴史的経緯から大分県域と熊本県域との間で「聖母マリア」の受容に差が表れたものと考えられる。

宮崎県域、鹿児島県域におけるNの回答率の高さは、
①九州地方におけるカトリック教会の中心地である長崎県域からの地理的な遠さ
②大分県のような歴史的背景を持たないこと
などの理由から説明できるものと考えられる。

【四　まとめ】

以上の考察から九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Santa Maria の受容史は次のようにまとめることができる。

1. 中世末期に受容された［santamaria］類は、九州西北部地域の潜伏キリシタン・カクレキリシタンの間で受け継がれ、現在に至っているものと解釈される。
2. 明治初期以降、カトリック教会では［santamaria］類とともに［se:maria］類が使用されたものと考えられる。現在のカトリック教会では［santamaria］類よりも［se:maria］類の方が広くかつ多く使用されており、［santamaria］類はカクレキリシタンのことばとして認識されている。
3. ［santamaria］類・［se:maria］類は、信仰対象である「聖母マリア」に対する尊称として使用されていると解釈される。「聖母マリア」を信仰するカクレキリシタン・カトリック信者の人々がこれらの事象を用いているのに対し、仏教徒・神道氏子など「聖母マリア」に対する信仰心を持たない人々の間ではこれらの事象が使用されていない。
4. 九州西北部の離島地域・沿岸地域には潜伏キリシタン・カクレキリシタン組織の所在が確認されており、カトリック教会が高密度で建立されている。これらの地域に［santamaria］類・［se:maria］類が分布している。
5. 地図3におけるNの回答率に示されるとおり，九州地方におけるカクレキリシタン及びカトリック教会の中心地である長崎県域を中心に、佐賀県域、福岡県域の順で「聖母マリア」が受容されている。他方、潜伏キリシタン・カクレキリシタンの伝統を持たず、カトリック信者の獲得・カトリック教会の建立が遅れた九州中南部地域（大分県南部、熊本県、宮崎県、鹿児島県）では、これと並行して「聖母マリア」の受容が進んでいないものと解釈される。

（注）

（注一）ラテン語、ポルトガル語またはスペイン語などが出自であり、中世末期以降に日本へ伝えられたと考えられるキリスト教の教義・信仰そのものに関わる外来語彙。中世末期に出版されたキリシタン資料などの文献資料に用例のあるもの。筆者による定義。

（注二）（一）調査期間…二〇〇三年八月～二〇〇五年一一月
（二）対象被調査者…外住歴三年以内、女性、老年層（調査時六〇歳以上）＜原則＞（三）調査方法…統一調査票による質問調査、実地調査（四）調査者…小川俊輔

（注三）民俗学の領域では、各県ごとに宗教や民俗に関する分布地

図が作られてきている。しかし、それらは民俗学の研究対象としてのみ扱われてきており、方言との関係で捉えるという視点が見られなかった。しかも、この民俗地図には、日本の伝統的な宗教の項目が扱われるだけで、キリスト教やイスラム教などの項目は対象外に置かれていた。他方、ヨーロッパでは、ヨーロッパ言語地図（Alinei 他（一九九七））及びその解説書（Alinei 他（一九九七））、Viereck（二〇〇六）などにキリスト教と方言事象分布との関係について考察した先行研究が見られる。

（注四）本稿では宮崎（二〇〇二）に従い「カクレキリシタン」を次のように定義する。すなわち、「キリシタン時代にキリスト教に改宗した者の子孫で、一八七三年に禁教令が解かれた後もカトリックとは一線を画し、潜伏時代より伝承されてきた信仰形態を組織下にあって維持し続けている人びと及びその宗教」。現在も長崎県下に存在する。なお、近世期（具体的には最後の宣教師小西マンショが殉教したとされる一六四四年）～一八七三年における同種の信仰者及びその宗教を「潜伏キリシタン」と呼び、「カクレキリシタン」とは区別する。この呼称の区別は、片岡（一九六七）、宮崎（一九九六、二〇〇二）に従うものである。

【主要参考文献】

Alinei, Mario 他(一九九七)『atlas linguarum europae volume I cinquième fascicule COMMENTAIRES』instituto poligrafico e zecca dello stato libreria dello stato

Alinei, Mario 他（一九九七）『atlas linguarum europae volume I cinquième fascicule CARTES』instituto poligrafico e zecca dello stato libreria dello stato

Ogawa, Shunsuke（二〇〇六・四）「A Geolinguistic Study on the History of Acceptance of the Christian Vocabulary in the Northwestern Area of the Kyushu District of Japan」, Astrid Van Nahl 編『Dialectologia et Geolinguistica 13/2005』pp.108–123, Mouton de Gruyter

Viereck, Wolfgang（二〇〇六・一一）「Chasing Butterflies: Why is a Butterfly called 'Butterfly'」Oebel, Guido 編『Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblata』Lincom Europa

石綿敏雄（二〇〇一・三）『外来語の総合的研究』東京堂出版

上田敏全集刊行会編（一九八五・三）『定本　上田敏全集　第九巻』教育出版センター

楳垣　實（一九四三・七）『日本外来語の研究』青年通信社出版部

楳垣　實（一九六三・七）『日本外来語の研究』研究社

江端義夫（二〇〇二・三）「方言文明史観」広島大学教育学部光葉会編『国語教育研究』第四五号所収、pp.32–42

江端義夫（二〇〇六・一一）「地理言語学の精神」Oebel, Guido 編『Japanische Beiträge zu Kultur und Sprache Studia Iaponica Wolfgango Viereck emerito oblata』Lincom Europa

小川俊輔（二〇〇六・五）「九州地方におけるキリシタン語彙 contas 及び rosario の受容史についての地理言語学的研究」日本語学会

編『日本語学会二〇〇六年度春季大会予稿集』所収、pp.93–100
小川俊輔（二〇〇七・三刊行予定a）「九州地方域方言におけるキリシタン語彙 Christão の受容史についての地理言語学的研究」、『広島大学大学院教育学研究科紀要』第五五号第Ⅱ部所収
小川俊輔（二〇〇七・三刊行予定b）「九州地方域方言におけるキリシタン語彙 pater/padre の受容史についての地理言語学的研究」広島大学国語国文学会編『国文学攷』第一九二・一九三合併号所収
奥村三雄（一九九〇・九）『方言国語史研究』東京堂出版
片岡弥吉（一九六七・六）『かくれキリシタン　歴史と民俗』日本放送出版協会
カトリック中央協議会出版部編（二〇〇四・十一）『カトリック教会情報ハンドブック2005』カトリック中央協議会
亀井　孝他編（一九八三・一一）『日本イエズス会版キリシタン要理　その翻案および翻訳の実態』岩波書店
国立国語研究所編（一九六六―一九七四・三）『日本言語地図』一～六、大蔵省印刷局
国立国語研究所編（一九八九・六―二〇〇六・三）『方言文法全国地図』一～六、大蔵省（→財務省）印刷局
小島幸枝（一九九四・一）『キリシタン文献の国語学的研究』武蔵野書院
小林　隆（二〇〇四・二）『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
迫野虔徳（一九九八・二）『文献方言史研究』清文堂出版
柴田　武（一九六九・八）『言語地理学の方法』筑摩書房
柴田　武（一九八八―一九九五・七）『糸魚川言語地図』上・中・下、秋山書店
純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編（一九八六・三）『プチジャン司教書簡集』聖母の騎士社
土井忠生（一九三三・七）「日本耶蘇会の用語に就いて」楳垣　實編『外来語研究』第三輯所収、pp.7-22、平野書店
土井忠生他編（一九七〇・一〇）『日本思想体系25　キリシタン書排耶書』岩波書店
土井忠生（一九七一・六）『吉利支丹語学の研究　新版』岩波書店
橋本進吉（一九六一・三）『キリシタン教義の研究』岩波書店
林　重雄編（一九八一・六）『ばうちずもの授けやう　おらしょの飜譯　本文及び総索引　●笠間索引叢刊77』笠間書院
福島邦道（一九七三・一二）『キリシタン資料と国語研究』笠間書院
藤原与一（一九七六・二）『瀬戸内海域方言の方言地理学的研究』東京大学出版会
松崎　實（一九二八・九）「天主教の部解題」、明治文化研究会編『明治文化全集　第一九巻　宗教篇』所収、pp.5–20、日本評論社
宮崎賢太郎（一九九六・一一）『カクレキリシタンの信仰世界』東京大学出版会
宮崎賢太郎（二〇〇二・三）『カクレキリシタン　オラショー魂の通奏低音』長崎新聞社
明治文化研究会編（一九二八・九）『明治文化全集　第一九巻　宗

教篇』日本評論社
森田　武（一九七六・三）『天草版平家物語難語句解の研究』清文堂出版
柳田征司（一九九八・一〇）『室町時代語資料としての抄物の研究』武蔵野書院
ヨハネ・ラウレス（一九四〇・三）「プチジャン司教とキリシタン伝統」『カトリック研究』第二〇巻第二号所収、カトリック研究社（純心女子短期大学長崎地方文化史研究所編（一九八六・三）『プチジャン司教書簡集』に再録。pp.225–238）

（辞書）

Glare, P. G. W.（一九九六）『Oxford Latin Dictionary』Oxford at the Clarendon Press
Gross, Ramón García-Pelayo Y. 編（一九八六）『Larousse Diccionario Moderno Español-Inglés』Larousse
Jarman, Beatriz Galimberti 他編（一九九四）『The Oxford Spanish Dictionary』Oxford University Press
Lewis, Charlton T. 他編（一九六九）『A Latin Dictionary』Oxford at the Clarendon Press
Simpson, J. A. 他編（一九八九）『The Oxford English Dictionary Second Edition』Clarendon Press・Oxford
Taylor, L.（一九七〇）『A Portuguese-English Dictionary REVISED』Stanford University Press
近松洋男（一九八〇・四）『中世スペイン語辞典』風間書房
日本キリスト教歴史大事典編集委員会編（一九八八・一二）『日本キリスト教歴史大事典』教文館

付　記

本稿は、広島大学大学院教育学研究科の江端義夫先生にご指導いただいて成ったものである。また、本稿で使用した方言資料は、三〇〇名を超える話者の皆さんの温かいご協力によって集められたものである。多くの方々に心より御礼申し上げる。

（広島大学大学院）